つぶやき101

博多とアジアの映画(91)

松浦　仁

「片腕カンフー対空飛ぶギロチン」（1975）は、18世紀の清朝を舞台に片腕を切り落とされ鉄の義手をはめた無双の武術家が、〈空飛ぶギロチン〉を武器にする盲目の老暗殺者と格闘する、低予算のB級カルト映画だった。香港のカンフー映画人気に当て込んだ松竹が配給して、1976(昭和51)年11月27日から東京で封切られた。博多では11月29日から福岡松竹で公開された。松竹が製作した日本のカンフー映画「少林寺拳法　ムサシ香港に現わる」との2本立てだった。

また、カンフー映画ではないが香港映画のもう一つの路線であるエロティック・ドラマの初期作品「金瓶梅」（1974、製作　ショウ・ブラザーズ）がヘラルドの配給で1976（昭和51）年1月に東京で公開された後、博多では3月6日から東映グランドで公開された。中国四大奇書のひとつでポルノ小説の古典として知られる「金瓶梅」を映画化、当時18歳でまだ無名だったジャッキー・チェンが出演している。

そして1978（昭和53）年4月、ゴールデン・ハーベストが製作した「死亡遊戯」が東宝東和の配給で公開された。「死亡遊戯」は、1972（昭和47）年秋にクライマックスの格闘シーンのみを撮影して「燃えよドラゴン」の製作に入ったため中断し、ブルース・リーの急逝で未完になっていたが、5年後にブルース・リーの代役を起用して格闘シーンを撮り足し、ブルース・リーの過去の作品のフィルムも合わせて編集して完成させた。博多では、4月22日からシネマ1・2、さらに中洲大洋映画劇場の4階にオープンしたばかりニュー大洋、博多駅筑紫口のサンハクト映劇の3館で同時上映された。

「ドラゴン危機一発」「ドラゴン怒りの鉄拳」「ドラゴンへの道」「死亡遊戯」と、ブルース・リー主演のカンフー映画を製作・配給（「ドラゴンへの道」は配給のみ）していたゴールデン・ハーベストは、1974(昭和49)年にすでに脚本家、映画監督、俳優としてマルチな活躍をしていたマイケル・ホイが、製作プロダクション〈許氏影業有限公司〉を設立して企画・脚本・監督・主演を務めた「鬼馬雙星 Games Gamblers Play」に出資して共同製作した。マイケル・ホイ演じる詐欺師で賭博師のブーは、服役中に刑務所で同房となったマイケル・ホイの実弟のサミュエル・ホイ演じるギャンブル狂の青年ロンと意気投合し、出所後に二人で金儲けに精を出す。トリックをつかってドックレースの賞金をヤクザからせしめるが、いかさまがばれて追われる羽目に…。

「鬼馬雙星」は香港で年間興行収入トップの大ヒットを記録し、1976(昭和51)年には「賣身契 The Contract」が製作された。長兄のマイケル・ホイが8年間の専属契約を結んでいるが出演機会のないテレビタレントのブー、次男のリッキー・ホイが得体の知れない物ばかりを作っている発明好きの弟チョンボ、三男のサミュエル・ホイがインド人マジシャンにこき使われ独立のチャンスを伺っている若手マジシャンのロンを演じ、ブーが別のテレビ局と契約するために、所属しているテレビ局との契約書を盗み出す作戦に打って出る。主役・準主役のホイ3兄弟による日本の国民的コメディアングループのザ・ドリフターズのコントのようなドタバタ・コメディだった。

そして1978(昭和53)年には「半斤八兩 The Private Eyes」が製作された。依頼された仕事はすべて受けるがかならずドジる、そして、とにかくセコい探偵事務所の所長ウォンにマイケル、間抜けな助手チョンボにリッキー、カンフーの使い手でお調子者のキットにサミュエルが演じて、ホイ3兄弟による探偵として失敗しながらも活躍するギャグありパロディありの前作以上のドタバタ・コメディだった。

1978(昭和53)年、東宝東和がゴ

ールデン・ハーベストから「死亡遊戯」を輸入した際にもう1本輸入したのが「半斤八兩」だった。「半斤八兩」は、「死亡遊戯」の配給権を獲得するために付いてきた、いわばオマケあるいは押し付けの映画だった。「半斤八兩」にあまり期待していなかった東宝東和は、配給せずにお蔵入りさせていたのだが、1979(昭和54)年、閑散期である2月の穴埋めの映画として「半斤八兩」を「Mr.Boo!ミスター・ブー」という邦題で、「ブルース・リー電光石火」の併映として2月3日から東京で公開した。「ブルース・リー電光石火」は、TVドラマ「グリーンホーネット」再編集版映画の第二弾で、1976(昭和51)年に製作されていた。2本立てのメインは、「ブルース・リー電光石火」だった。

観客の大半はブルース・リー目当てに来場し、ついでに「Mr.Boo!ミスター・ブー」を観賞したのだが、香港映画ならではの小気味よいストーリー展開と満載のギャグ、ホイ3兄弟の名(迷)演技に爆笑し、ゆるくてキッチュな香港映画に気づかされたことだろう。博多では、3月10日からスカラ座、3月30日からシネマ2で東京と同じ「ブルース・リー電光石火」と2本立てで公開された。

ところで、シネマ2で「ブルース・リー電光石火」と「Mr.Boo!ミスター・ブー」が公開された同日の3月30日には、福岡東宝で「ブルース・リーを探せ」が公開された。1976(昭和51)年に製作された香港・カンフー映画で日本へラルド映画が配給した。ブルース・リーの死の真相を探るために香港にやって来た友人のデイビッド・リーが、数少ない手掛かりをたどるうちに地下犯罪組織が立ちはだかり、多数の悪漢どもと死闘を繰り広げる…。ブルース・リーの人気にあやかった便乗映画だった。

話はもどって「Mr.Boo!ミスター・ブー」。邦題となったミスター・ブーとは、マイケルが演じる主人公の探偵事務所の所長ウォン・ヨクシー(黄若思)が、ザ・ドリフターズのメンバー高木ブーに似ていたことで日本語吹替え役名をブーに、さらに邦題もミスター・ブーとした。また、タイトルに濁点を入れるとヒットするというジンクスにあやかって付けられたという説もあるようだ。

「鬼馬雙星」「鬼馬雙星」「半斤八兩」は、それぞれ独立した企画で、ホイ3兄弟の演じる役柄は似通ってはいるが、題名にも設定にも共通点はなかった。ところが、日本では「Mr.Boo!」という邦題でシリーズ化された。日本での公開は製作順ではなく、1979(昭和54)年に初公開された「Mr.Boo!ミスター・ブー」は3作目だった。

「半斤八兩」の次に公開されたのは2作目の「賣身契」で、邦題は「Mr.Boo!インベーダー作戦」だった。日本では「Mr.Boo!」のシリーズとして公開しているのだが、「Mr.Boo!ミスター・ブー」との関連はなく、ホイ3兄弟の役も前作の探偵事務所の所長、助手、カンフーの使い手とは異なり、テレビタレント、発明家、マジシャンだったのだが、日本語吹替え版の役名をブー(マイケル)、チョンボ(リッキー)、キット(サミュエル)と同じにした。

また、邦題の「インベーダー作戦」にしても後半にブーとチョンボが放送局のバックヤードにあったインベーダー(宇宙からの侵入者)の衣装を纏ってプロデューサーの手下から逃げるシーンがある程度で作戦というものではなかった。それでも公開番組でプロのダンサーに交じって踊るインベーダーダンスは秀逸だった。インベーダーは、60年代にアメリカで製作された同名のテレビドラマで日本にも知られ、さらにこの映画の公開当時はインベーダーゲームが日本中で流行っていて、その親しみやすさから邦題にしたのだろう。

「Mr.Boo!インベーダー作戦」は、「Mr.Boo!ミスター・ブー」の公開からわずか3ヵ月後の5月26日から東京で公開され、博多では5月30日からスカラ座、6月29日からシネマ1で公開された。

次号に続く

＝図版は、「Mr.Boo!ミスター・ブー」＝